

依頼会話の【終結部】の考察

—日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面の ロールプレイデータを比較して—

徐 孟鈴

キーワード 会話【終結部】の構造 依頼会話の【終結部】 発話類型
ロールプレイ会話 台湾人上級日本語学習者

1. 研究の目的

どのようにして会話を終わらせるかは人間関係に影響を与えることが考えられる。会話の終結部（closing section）の意義について岡本（1990：154）は、「人間のコミュニケーションや相互作用という観点から考えると会話を終結させるという行為は会話の進展という相互作用を停止させるという意味で基本的には回避されるべき行為なのである。そこで、会話が終っても2人の関係が終わりではないことを示すことにより、2人の関係を維持することができるのである。そのために“Closing Section”（終結部）が次の行為との間をつなぐ役割を担う部分として必要なのである。」と述べている。このように会話の終結部は人間のコミュニケーションや相互作用のうえで重要な役割を担っているのである。会話の内容が相手に大きな負担をかける依頼であれば、依頼側にとってどのように会話を終結させるかは大きな問題になる。

そこで、本稿では依頼会話の終結部に焦点を当て、日本語母語場面と台湾人母語場面の対照会話分析を行い、日台両母語場面の相違点について考察する。さらに母語場面の分析結果をもとに、日台接触会話の終結部に見られる台湾人上級学習者の特徴を探り、接触会話の問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

会話の終結部についての先行研究はほとんどが電話会話のデータに基づいたものである。その中でも日米の電話会話の対照研究が多い。これらの対照研究

によれば、日本語電話会話の終結部については次のような特徴があるという。

1) 会話を終結する主導権はかけ手に委ねることが多い。2) 「感謝やお詫びの表明またはその繰り返し」は日本語の電話会話の終結部の重要な要素である。3) 終結部の切り出しでもっとも多く使われる日本語の標識は「じゃあ／それじゃ／それでは」である。4) 英語では「goodbye」と言って別れるが、日本語では「さよなら」はほとんど言わない。

日米の電話会話の対照研究に比べると日中対照の研究はまだ少ない。電話会話の終結部についての日中対照の研究には、黄（2005）がある。黄は、携帯電話の会話における開始部と終結部について日中対照を行っている。調査の結果では、日本人も台湾人も終結部に移行する段階で「マーカー＋結論から導き出された行動確認」というやりとりを行うという点は共通しているという。そしてマーカーとして日本人は「じゃあ」を使うのに対して、台湾人は「好／好啦」を使用している。一方、日中の相違点として、日本人は「お詫び」と「宜しく」のような表現を多く用いるが、それに相当する中国語の発話例は調査では見当たらなかったという。

日本語学習者の会話終結部の研究として岡本・吉野（1997）、尾崎（2002）をあげたい。岡本・吉野（1997）と尾崎（2002）では、日本語学習者の終結部の問題点として、1) 日本語学習者は言われたことに対して受動的に応答することはできるが、自ら主導権をとって会話を終結に向かわせることができない、2) 学習者は日本人のように「じゃ」を適切に使って、円滑な話者交替を行うことができない、という2点を指摘している。

先行研究では母語話者をデータとしたものが多く、接触場面の終結部に焦点を当てた研究は少ない。また筆者の知るかぎりでは、依頼会話を分析した先行研究はないようである。

3. 会話【終結部】の構造と研究課題

3. 1 【終結部】の構造

会話がどのようにして終了するかについてはじめて明らかにしたのは Schegloff and Sacks（1973）である。その後Schegloff and Sacksが提示したモデルの修正や、日本語のデータの分析に応用したりする一連の研究がある（Clark and French 1981、岡本1990、熊取谷1992、小野寺1992、藤原1998など）。これらの研究はすべて電話会話のデータに基づいて分析を行っており、会話は3つの段階を踏んで終了するとしている点では一致している。例えば、小野寺（1992）

では、日本語の電話会話の終結部を「前終結（pre-closing）—人間関係の再確認（leave-taking）—最終的やりとり（terminal exchange）」の3つの段階に分けて分析している。「前終結」は、会話終了の開始部分であり、会話参加者双方が先行発話を締めくくり、新しい話題を提供しないことにより会話の終結に同意する部分である。

2人の合意によって「前終結」が成立したら、「人間関係の再確認」の段階に移行することができる。「人間関係の再確認」の段階では、今後も良好な関係が続くということをお互いに確認しあうやりとりが行われる。「人間関係の再確認」を経て、「最終的やりとり」で別れの言葉が交わされ、これで会話がすべて終了するとしている。

対面会話においても会話の終結部は基本的には上記の3つの部分からなると考えられる。本稿でも、終結部は「前終結—関係再確認—別れ」の3つの部分からなるという考え方をとり、分析を進める。

3. 2依頼会話の【終結部】

依頼の会話では依頼を実行するための約束が決まった時点で会話を終了してもよいとみることができる。したがって既に決まった約束の内容の繰り返しや再確認の発話は依頼会話終了の開始発話とみなす。その終了開始の発話を受けて相手も終了に同意すれば、依頼の【前終結】が成立することになる。【前終結】は基本的に終結の提案とそれに同意する発話からなる短い発話交換である。

【前終結】が成立すると同時に会話が終了する場合もあるが、依頼の場合【関係再確認】のやりとりが行われることが多い。最後に【別れ】の挨拶が交わされて依頼会話が最終的に終了する。【別れ】には「さよなら」、「バイバイ」など会話を終わらせる別れの挨拶表現が必ず含まれる。依頼終結部を構成する3つの部分を実際の会話例で示すと次のようになる。

会話例：日本人母語場面の会話例^{注1}（A：依頼側；B被依頼側）

A 1：じゃ木曜と月曜に	}	【前終結】
B 2：そうだね月木で 月木じゃ昼間手伝って大丈夫だと思う		
A 3：ありがとう	}	【関係再確認】
B 4：とんでもないです		
A 5：じゃお願いします。		
B 6：分かった	}	【別れ】
A 7：じゃ		
B 8：はい		
A 9：お邪魔しました		
B 10：じゃねバイバイ		
A 11：バイバイ		

3. 3研究課題

第2節の先行研究を踏まえて、本稿では次の3つの研究課題を立てる。

課題1：依頼の【前終結】は会話参加者のどちらによって始められるか、それはどのような言語表現によって実現されるかについて調べる。

課題2：【関係再確認】ではどのようなやりとりが行われるかを言語表現とその使用率の両方から調べる。

課題3：【別れ】の発話の言語表現とその使用率について調べる。

上記の3つの課題を日台両母語場面で比較分析して日台の相違点を明らかにし、その上で接触場面の台湾人上級日本語学習者の問題点を分析する。

4. 研究方法

4. 1 データ収集の方法

データはロールプレイにより収集した。録音の前に、協力者にそれぞれの役割カードを読ませて別々に説明を行ったあとで、筆者は退席し、録音の操作は協力者に依頼した。状況の設定は同性の親しい友達に授業について助けてもらうもので、日本語のロールカードは下記の通りである。台湾人母語場面では中国語のロールカードを提示した。

ロールカードA：あなたは大学院に入るための勉強をしており、そのために「応用言語学」という授業を取っています。しかし、授業に困っているため、親友のBに助けてほしいと思っています。Bは論文やバイトで忙しいのを知っていますが、それでも悩んだ末にあなたはBに助けを頼むことにしました。

Bの家を訪問し、しばらく雑談をしてから依頼を始め、相手が承諾するまで依頼を続けてください。

ロールカードB：親友のAが訪ねてきました。何か頼みごとがあるようです。あなたはAを助けてあげたいのですが、自分の論文やアルバイトが忙しいので依頼を受けるためには何らかの犠牲を払わなければなりません。断りたい気持ちをAに2、3回匂わせた後、仕方なく依頼を引き受けてください。

4. 2 ロールプレイ調査の概要

日台両母語場面の調査は2001年に実施した。20代から30代で日本、台湾に在住の大学生及び大学院生に依頼し、それぞれ30組、合計60組（男性60名、女性60名；計120名）のロールプレイを収集した。外国語学習の影響を排除するため中国語または日本語の学習歴が半年を越えない者に限定した。

接触場面の調査は1999年から2000年にかけて日本で実施した。台湾人上級学習者（男性15名、女性15名）に親しい日本人とロールプレイをするように依頼し、30組（60名）のデータを収集した。日本人の年齢は24歳から34歳であった。学習者の資料は次の通りである。

表1 台湾人上級日本語学習者のプロフィール

身分	日本在住の大学生、大学院生	日本語学習歴	平均6.8年（4－12年）
年齢	平均24.5歳（24－31歳）	日本滞在期間	平均3.5年（1－8年）
日本語能力レベル	上級（全員日本語能力試験一級試験に合格しており、日本語で授業をうけ、論文を書いている学習者）		

4. 3 データの処理

90組（180人）の録音データ、約450分間を文字化した。文字化の作業は筆者が行って、その後日本語と中国語の母語話者それぞれ1名に確認を求め修正を行った。

4. 4依頼会話【終結部】の「発話類型」

依頼会話【終結部】の発話データを意味内容によって10の「発話類型」に分けた。「発話類型」の認定作業は筆者が1ヶ月あいだをにおいて2回行った。2回の認定間に不一致が生じた類型については筆者が基準を決めて最終的な判断をした²。「発話類型」の説明と実際の会話例は次の表2の通りである。

表2 【終結部】における発話類型

【終結部】の構造	発話類型の名称と定義	日本語の例	中国語の例（括弧内は和訳）
前終結	1. 終結開始：依頼談話の終結を提案する発話	じゃ金曜日に	那我這個禮拜就來找妳囉（じゃ今週からくるね）
関係再確認	2. 感謝：感謝の気持ちを述べる発話	ありがとう；助かった	那就謝謝囉（じゃありがとうね）
	3. 謝罪：申し訳ない気持ちを表明する発話	迷惑かけてごめんね	該当例なし
	4. 努力保証：これ以上迷惑をかけないように努力する意志を表明する発話	ちゃんと自分も頑張って迷惑かけないように	我會很積極的（頑張るから）
	5. 見返りの言及：貢献を申し出る発話	お礼はいつか必ず	那妳以後有什麼事情需要我幫的話，我一定會幫妳（今度代わりになにか必ず協力するから）
	6. 友情の確認：お互いの友情について確認する発話	該当例なし	沒辦法好朋友就你一個（親友は君だけだからしょうがないな）
	7. 冗談：依頼が引きずる気まずさを和らげるための冗談	該当例なし	那一起看日出（じゃ一緒に朝日を迎えよう）
	8. 儀礼表現：今後も良好関係を保とうとする発話	じゃ宜しく	該当例なし
	9. 将来の接触への言及：今後の接触について言及する発話	じゃまた今度遊ぼう	有空常來（また今度は非遊びにきてね）
別れ	10. 別れ：別れの挨拶	さよなら／じゃ宜しく	再見（さよなら）／改天再聊（また今度お話をしよう）

5. 分析と考察

5. 1 【前終結】

5. 1. 1 日台母語場面の比較

本節では【前終結】の開始発話について考察し、日台母語場面を比較する。

先行発話で既に決まった内容の結論を繰り返したりすることは新しい話題がないことの印であり、この時点で対話相手が同意すれば会話を終了してもよいということになる。よって、本稿ではこのような発話は依頼の【前終結】の開始発話と認定し、「終結開始」と呼ぶ。

「終結開始」は、日本人も台湾人も依頼側と被依頼側がそれぞれ15人によって切り出されている。この点で日台両母語場面に違いはない。

岡本（1990）は、日本語の電話会話においては、「受け手」は別れを切り出すことを避け、「かけ手」に別れの段階に移行する主導権を持たせると述べている。「受け手」が先に終了の合図を切り出さないのは、会話の目的が達成されたかどうかの判断は「かけ手」に委ねられているからであるという。つまり、電話会話の終結部では、用件があって電話してきたかけ手のほうから会話終了の合図を切り出すことが一般的であると考えられる。岡本の考えに従えば、依頼の会話では依頼側が用件を済ませたら会話終了の合図を切り出すことが予想される。しかし、本稿の場合は日台母語場面の依頼談話中、会話終了の合図を切り出した人は、依頼側と被依頼側がそれぞれ半数を占めている。

先行研究との相違から次のようなことが考えられる。頼みがあって依頼を切り出した依頼側が用件が済んだらすぐ談話を切り上げると、自己中心的で身勝手だという悪い印象を被依頼側に与える恐れがあるため、依頼側は気をつけて談話を終了に向かわせなければいけない。一方、負担がかかる依頼を引き受け、その点では優位に立っているともいえる被依頼側が会話の終了を切り出しやすいということも考えられる。今回の場合は親友という間柄であるため、会話参加者のどちらから会話終了の合図を切り出してもそれほど人間関係上の心配が生じないということも上記の結果につながっているだろう。

今回の結果からは、会話参加者のどちらが主導権を握って談話を終了させていくかということは常に決まっているわけではないと言える。談話の目的や、会話参加者双方の力関係もしくは社会的地位などの要素が変われば終結の仕方も変わることが予想される。これについては今後さらにデータを収集して調べる余地がありそうである。

次に「終結開始」の表現内容をみていく。依頼側、被依頼側を問わず、「終結

開始」を行った30人の発話を分析した結果、次の表3のように4つの下位類型が認められた。

表3 「終結開始」の下位類型 一日台使用人数の内訳と会話例―

「終結開始」の下位類型	日本人 (n=30)	台湾人 (n=30)	日本語例	中国語例
a 約束の内容を再確認する発話	20名	10名	じゃ木曜日と月曜日に	那就星期六開始囉 (そんじゃ土曜日から始めるね)
b 総括表現で会話の終結を暗示する発話	7名	13名	じゃそういう感じでいいかな	那這件事就這樣說定了 (じゃそういうことで)
c 終了しなければいけない理由を提示する発話	2名	5名	じゃお忙しそうだしそろそろ…	那我今天就不打擾啦 那我先回去囉 (じゃおじゃましました、帰るね)
d その他	1名	2名	今日はありがとう	那今天晚餐呢感謝妳鼎力相助 請妳吃飯 (じゃ協力してくれたお礼に今日はディナーを奢る)

表3のとおり日本語の「終結開始」として一番多く用いられるのは下位類型のaタイプ〈約束の内容を再確認する発話〉であり、30人中20人いた。次に下位類型のbに相当する例は7例あり、cとdは計3例のみだった。

一方、中国語の「終結開始」の表現は、bタイプ<総括表現で会話の終結を暗示する発話>に相当する例が最も多く13例だった。その次はaタイプの10例である。それからcに相当する例が5つであり、下位類型d〈その他〉は2例のみだった。

「終結開始」の表現として、下位類型のaとbの例がもっとも多い点では日台で共通していることが分かった。相違点として、日本人は約束の具体的な日について触れて先行発話を締めくくるのに対して、台湾人は「那這件事就這樣說定了」(じゃそういうことで)のような総括表現で会話を終了に向かわせる言語習慣に差異が見られた。それから、日本人に例がない台湾人の特徴として、台湾人依頼者は、下位類型dの例のように「那今天晚餐呢感謝妳鼎力相助請妳吃飯」(じゃ協力してくれたお礼に今日はディナーを奢る)、「見返り」発話で会話の流れを変えることによって先行発話の終了を暗示する例がある。dの

例のほかにも「終結開始」の発話と同一ターンで「見返り」の一言を添える中国語の例は4例あった。日本人には「終結開始」の発話に「見返り」の言及例がなかった。

【前終結】において日本語では「じゃ」という談話標識の使用が多いことはすでに指摘されているが、本稿でも「終結開始」の表現として「じゃ」が多く用いられることが分かった。本稿の会話例では、日本人は【前終結】で「じゃ」を使用している人数は26人であり、使用率は全体の87%以上に上っているという興味深い結果が出ている。日本人の「じゃ」に対して、中国語の場合は「好／好吧」「那／那就」「好～那／那就～」などの談話標識を組み合わせで使用していることも分かった。今回の中国語の会話例はすべてこれらの談話標識を使用しており使用率は100%である。黄（2005）では、中国語の場合は【前終結】では「好／好吧」を多く用いると報告しているが、本稿では「好／好吧」に加えて、中国語は依頼の【前終結】の談話標識として「那／那就」の使用と「好～那／那就～」のような組合をも多く使用することが明らかになった。

5. 1. 2接触場面の台湾人学習者

接触場面では、「終結開始」を切り出した依頼側の学習者は30人のうち14人であり、日台両母語場面とはほぼ同じである。次の表4は「終結開始」を切り出した14人の学習者が実際に使っている言語表現と下位類型の使用人数の内訳をまとめたものである。

表4 「終結開始」を切り出した学習者の言語表現と下位類型の使用人数

「終結開始」の下位類型	台湾人学習者の言語表現 (n=14)
a 約束の内容を再確認する発話（4名）	じゃ今週ね
	じゃ来週からよ
	分かりました、来週からです
	あうんその時間に来るんで
b 総括表現で会話の終結を暗示する発話（3名）	じゃこれから宜しくね
	じゃ宜しくね
	はい ええでは じゃということで
c 終了しなければいけない理由を提示する発話（4名）	じゃBさんのほうが忙しいから（うん）ね、論文とかあるから
	じゃ、お忙しそうだし（そうだね）僕もそろそろ帰るから
	じゃ、もう遅いから今日はこれで
d その他（3名）	じゃ多分忙しいと思いますのでこれで
	あ 感謝します どうもありがとう

「終結開始」の表現については、14人の学習者のうち、下位類型 a と c を用いた学習者はそれぞれ 4 人であり、下位類型 b と d を用いた学習者はそれぞれ 3 人である。数が少ないのではっきりした傾向が見られなかったが、学習者の中には「はいええでは じゃということで」(表 4 の b)「あ 感謝します どうもありがとう」(表 4 の d) などの不自然な表現が見られた。

「終結開始」に伴う談話標識の使用については、学習者は14人中11人が「じゃ」を使用しており、「じゃ」を用いる比率がかなり高かった。今回の上級の学習者は依頼の【前終結】の段階で「じゃ」という談話標識を用いる傾向が日本語母語場面と共通していることが分かった。

5. 2【関係再確認】

5. 2. 1日台母語場面の比較

【関係再確認】の段階で依頼側が用いた発話類型は 8 つに分かれており、3 場面それぞれの使用人数と使用率は表 5 に示した通りである。

表 5 「関係再確認」の発話類型— 3 場面の比較—

発話類型	日本人 (n=30)		台湾人 (n=30)		学習者 (n=30)	
	人	% (回)	人	% (回)	人	% (回)
1. 感謝	22	51% (36)	10	25% (13)	19	54% (25)
2. 謝罪	14	26% (18)	0	0 % (0)	4	8 % (5)
3. 努力保証	2	4 % (3)	2	6 % (3)	2	5 % (3)
4. 見返りの言及	1	1 % (1)	13	33% (17)	3	8 % (5)
5. 友情の強調	0	0 % (0)	1	2 % (1)	1	2 % (1)
6. 冗談	0	0 % (0)	3	10% (5)	1	2 % (1)
7. 儀礼表現	9	14% (10)	0	0 % (0)	12	20% (13)
8. 将来の接触への言及	2	3 % (2)	12	25% (13)	2	3 % (2)
発話類型の合計	—	100% (75)	—	100% (56)	—	100% (73)

(グループごとの上位 3 位までは太字で示した)

表 5 の通り【関係再確認】の発話類型の種類と数には、日台間で大きな相違が見られた。日本語母語場面は「感謝」の使用人数が22人と 2 / 3 を超えており、使用率が全体の半分以上を超えて、51%にのぼっている。その次に「謝罪」も14人と半数近くの人に使用されており使用率が26%だった。次に多いのが「儀礼表現」であり、使用人数が9人、使用率が14%である。それに対して台湾人母語場面は「見返りの言及」の使用人数が13人と一番多く、使用率は33%であ

る。次に「将来の接触への言及」と「感謝」がそれぞれ25%であり、使用人数はいずれも1／3を超えている。

【関係再確認】の段階で用いられた発話類型で日台間に共通して使用が多かったものは「感謝」のみである。しかしながらその共通している「感謝」でも、日本人の使用率と使用人数ともに台湾人の倍になっており、半数弱の日本人が使用していた「謝罪」は台湾人に使用例がなかった。

日本語の会話の終結部には「感謝と詫びの使用及びその繰り返し」が多いという特徴があることは先行研究で言われているが（岡本1990、小野寺1992）、本稿の結果も先行研究の見解を支持するものとなっている。

そのような日本語の特徴に対して今回の中国語のデータでは「見返りの言及」と「将来の接触への言及」の使用例が多かった。「見返りの言及」について、浜田（1995）は、中国語では「見返り」は相手の負担に対する埋め合わせになる一方、聞き手の潜在的依頼を受け入れることの表明にもなり、「互恵的行為」であると述べている。中国人社会では互いに頼み頼まれることで人間関係が強固になっていくという考え方があり、「見返り」は依頼の補償として大きい役割を果たしていると説明している。さらに小林（2004）では、「中国人被依頼側からは、依頼側の「見返りを受ける」ことは、お互いの友情を築ききっかけとなるから嬉しい」との報告もある。先行研究で言われているように、恩返しをすることや「将来の接触への言及」は、これからも積極的にお互いの友好関係を結んでいこうとする姿勢の表明となり、中国人社会では重要視されているのである。今回の台湾人のデータは、「見返り」と「将来の接触への言及」および「感謝」が依頼側の主要な補償戦略となっていることを示しているが、この結果は先行研究を裏づけていると考えられる。

一方、今回のデータでは日本人に見られる「宜しく」のような「儀礼表現」が台湾人には見られなかった。中国語には「宜しく」に近い表現として「麻煩你了」「拜託你了」などがあるが、今回用いられなかった理由として、「麻煩你了」「拜託你了」は日本語の「宜しく」に比べて改まった感じがするので親友同士間で使いにくいかもしれない。

5. 2. 2接触場面の台湾人学習者

台湾人学習者が用いた【関係再確認】の発話類型の使用率と使用人数も表5に示した。表5の通り、学習者が一番多く使用している類型は「感謝」であり、使用人数が19人、使用率が54%と使用総数の半分以上を占めている。次に多い「儀礼表現」も12人の学習者によって使用されており、使用率が20%と高い。この結果は、日本人がよく使っている発話類型を学習者もよく使っていること

を示している。また、一方において台湾人が多く使用している「見返りの言及」と「将来の接触への言及」の使用は少なかった。この2点から総合的に考えると、台湾人学習者は【関係再確認】の発話類型の使用が日本人とよく似ていると言えるだろう。ただし、「謝罪」に関しては日本人に比べて使用人数も使用率も低く、台湾人の使用に近い。「謝罪」を繰り返す日本的な会話の進め方は台湾人学習者にとっては上級になっても馴染みにくいものなのかもしれない。

学習者は日本人がよく使う「どうぞ宜しくお願いします」という「儀礼表現」がうまく使えないということが先行研究で言われている（池田等2002、尾崎2002）が、本稿の上級の台湾人学習者はこの表現の使用人数と使用率ともに日本人を上回る結果となっている。その原因として考えられるのは、「どうぞ宜しくお願いします」という常套語句は日本で生活しているとよく見聞きするし、一旦身につけると大変便利な表現であるため、定着しやすいということである。本稿の被験者は全員日本に留学している上級レベルの学習者で、日本の滞在期間も平均3.5年と長いために、「どうぞ宜しくお願いします」の使用に不自由がないことも意外ではないかもしれない。

5. 3 【別れ】

【別れ】の段階では、「さよなら」「バイバイ」「またね」「帰るわ」などのようにその表現自体が会話を終結させるような定型表現が使われる。これらを「別れの挨拶」と呼ぶことにする。「別れの挨拶」に伴ってよく使用される表現がいくつかある。例えば、「お願いします」「ありがとう」「突然来てごめんね」などの表現がそれである。これらの表現が同一ターンの中で「別れの挨拶」の前後に用いられるのは、話し手が最後の最後まで人間関係に配慮していることをよく示している。

表6は【別れ】の段階の発話を「別れの挨拶」と「それ以外の表現」に分けて、3場面の使用回数と使用人数をまとめたものである。

5. 3. 1日台母語場面の比較

表6 「別れ」の言語表現とその使用人数・回数

「別れ」の言語表現	日本人 (n=30)	台湾人 (n=30)	学習者 (n=30)
a 別れの挨拶 (使用人数/回数)	さよなら バイバイ またね (30名/60回)	再見/拜拜 (さよなら) 那我先回去了 (じゃお先に) (28名/28回)	さよなら バイバイ じゃ帰るわ (29名/29回)
別れの挨拶の小計	60回	28回	29回
b それ以外の表現 (使用人数/回数)	①じゃお願いします (2名/2回) ②お忙しいだろうから (4名/4回) ③じゃありがとうね /今日突然来てごめん (4名/5回) ④また遊ぼうね (1 名/1回)	①好, 那就這樣囉 (14名/16回) ②好那時間不早我還 有事先走了/那你忙 吧不打擾啦 (13名/17回) ③那先謝囉 (1名/1回) ④那改天再聊囉/下 次有時間一起吃飯 (6名/6回)	①じゃこれで/じゃ ということで (7名 /9回) ②じゃまた用で帰る わ/じゃBも疲れて ると思うので (12名 /13回) ③すみませんお忙し いところで/今日ご 馳走さま (2名/2 回) ④今度ご飯食べに行 こうね (4名/4回)
それ以外の表現小計	12回	40回	28回

「別れ」の言語表現については、「別れの挨拶」は日台ともにほぼ全員によって使用されているのが共通点である。相違点として日本人はa「別れの挨拶」を1人あたり2回ぐらい繰り返して使用しているのに対して、台湾人は「別れの挨拶」に「それ以外の表現」を添えるような表現を使用するところに違いが見られた。台湾人は半数の人がb「それ以外の表現」を用いており、特に「総括表現」と「理由提示」を「別れの挨拶」に合わせて使用することが多かったことが分かった。実際の中国語の例では「好(じゃ)那時間不早(もう遅いので)我還有事(まだ他に用事があるから)先走了(お先に)」のような例がある。これは普通に見られる中国語の別れの挨拶表現であるが、1つのターンで複数の情報が含まれているのである。そのほかにも「那你忙吧(お忙しいだろうから)不打擾啦(お邪魔しないように)」など似たような表現が多くある。このような情報量を多く含む慣用表現が中国語にあることが今回台湾人のb「そ

れ以外の表現」を多く使用した理由の1つではないかと考えられる。

「それ以外の表現」の下位分類の④〈将来の接触への言及〉も日本人と異なる台湾人の特徴である。④の最初にあげられている例は「那改天再聊囉」という中国語である。それを日本語に直訳すると（じゃまた今度話しをしよう）のような文になってしまうが、日本語にはそれに相当するような慣用表現がない。続いて同じ④の例2では「下次有時間一起吃飯」（今度時間があったら一緒にご飯食べよう）の例があがっている。別れる際に今度一緒に食事する約束への言及も中国語の特徴の1つであり、今回の日本語には例が見当たらなかった。

最後に【別れ】の段階で使用される談話標識として、日本人は22人が「じゃ」を使用していることが分かった。それに対して、台湾人の場合は「好」、「那就」を多く使用しており、30人のうち27人が使用していることが分かった。【別れ】でも【前終結】と同様、「じゃ」、「好」、「那就」が高い使用率であることが明らかになった。

5. 3. 2接触場面の台湾人学習者

【別れ】の段階の学習者の発話類型使用回数は57であり、3場面でもっとも少ない。発話類型の下位分類では、「別れの挨拶」を用いた学習者は29名であり、ほぼ全員が使用しているところは両母語場面と共通している。「別れの挨拶」の使用回数29回は、日本人の半分で、台湾人母語場面とほぼ同様の結果となっている。「別れの挨拶」に関しては、日本人との相違点として「失礼します」を挙げるができる。日本人で「失礼します」を使った例は一つもなかったが、学習者は7人がこの表現を使用していた。親友同士の別れの場面でこのような表現を用いると、日本人に不自然な感じを与えるだろう。

次に、「それ以外の表現」では、学習者の使用回数、人数ともに台湾人母語場面寄りの結果となっている。日本人に比べて、学習者はaの「別れの挨拶」にbの「それ以外の表現」を併せて使用する傾向があり、これは台湾人と似ている。「それ以外の表現」の下位分類の使用人数も台湾人に似た傾向を示していると同時に、表現形式にも中国語の影響があると思われるものがいくつか観察された。例えば表6の下位分類①〈総括表現〉の例では「じゃこれで／じゃということで」のような表現は日本人に使用例がなかったのだが、それは台湾人がよく使用している「好，那就這樣囉」の表現にかなり似ている。次に下位分類②の例「じゃまた用で帰るわ」、「じゃBも疲れてると思うので」のような表現は日本語としてなんとなく不自然な感じがするが、中国語の表現「那我還有事先走了」「我想你也累了吧」を思い浮かべさせるのである。そのような学習者の表現は中国語の影響を受けている可能性が考えられるのである。

最後に学習者の談話管理上の問題点に少し触れたい。まず、談話標識の使用については、【別れ】の発話に「じゃ」を使用した学習者は16名であり、【前終結】に引き続き半数以上の学習者が使用していることが分かった。

次に会話例では学習者が「うんそれじゃ失礼しますバイバイ」のように、まだ別れを惜しんでいる日本人にターンを渡さずに、1ターンで一方向的に会話を打ち切る例が見られた。何回も話者交代をしながら徐々に会話を終了させていく日本人が相手なら、そのような急な別れ方に唐突な印象を受けるかもしれない。一方向的に会話を打ち切るような例から、台湾人学習者は相手に発話権を渡す適切な移行場所の把握が不十分であるという問題が指摘できる。このような話者交代ルールに違反するような終わり方は人間関係にマイナスの影響を与える恐れがある。特に依頼の場合は、用件が済んだからといって、さっさと会話を終わらせると、身勝手だと被依頼側に思われる危険が大きくなるだろう。

会話の終結部が人間関係を維持するために重要な役割を果たしていることは先行研究でも言われてきているが、今後はさらに相互作用という視点から終結部の重要性を学習者に認識してもらい、表現レベルに加えて話者交代のルールのような談話管理の視点からの教育と指導が望まれる。

5. 4 まとめ

本稿は依頼談話の【終結部】について日台母語場面と接触場面の学習者の依頼側の発話について比較分析した。その結果を次のようにまとめる。

1. 依頼の【前終結】では、日台母語場面とも依頼側と被依頼側それぞれ15人が【前終結】を開始している。接触場面では依頼側30人のうち14人が【前終結】を切り出しており母語場面と大差はない。「終結開始」の表現内容は3場面とも4つのタイプを使用している。日本人は〈約束の内容を再確認する発話〉を一番多く使用しているのに対して、台湾人は〈総括表現で会話の終結を暗示する発話〉を多く用いる。台湾人は「終結開始」の発話に「見返り」に言及する特徴も見られた。台湾人学習者の「終結開始」の下位分類の使用についてははっきりした傾向が見られなかった。

2. 【関係再確認】の発話類型の使用については、日台母語場面で大きな相違が見られた。日本人は「感謝」と「謝罪」を多く用いる一方、台湾人は「見返り」、「感謝」と「将来の接触への言及」を多く使う。日台ともに多く用いられた類型は「感謝」のみであるが、それでも日本人は使用率、人数ともに台湾人の使用の倍であり、やはり開きが大きかった。台湾人学習者は「感謝」と「儀礼表現」の2つの類型の使用が多く、全体的な使用傾向は日本人に近い。しかし、日本人のように「謝罪」を繰り返す別れ方は学習者が上級になっても馴染

まないようである。

3. 【別れ】の発話類型については、日本人は「別れの挨拶」を2回ほど繰り返すのに対して、台湾人と台湾人学習者は「別れの挨拶」に「それ以外の表現」を添える発話の数が多い。中国語には1つの発話に多くの情報量をもつ慣用句があるのが原因であると考えられる。学習者の「それ以外の表現」の使用回数とその表現には中国語の影響と考えられるものが見られた。

4. 【終結部】で多く用いられる談話標識として、日本語は「じゃあ」、中国語では「好／好吧」「那／那就」「好～那／那就～」を多く使用していることが分かった。上級台湾人学習者の「じゃ」の使用は日本人と違ったところは見られなかった。

5. 【別れ】に見られる台湾人学習者の問題点として、1つのターンで多くの情報を一気に言ってしまう、一方的に会話を打ち切る点があげられる。このような問題には2つの理由が考えられる。1つは中国語の慣用句の影響である。もう1つは日本語の話者交代の習慣が十分に把握できていないという問題である。

6. おわりに

本稿は依頼談話の【終結部】における日台両母語場面の特徴を明らかにした。上級の台湾人学習者の【終結部】の発話類型の使用は日本語母語話者に近づいている様子が見られるものの、一方的に会話を打ち切るなど会話をうまく終結していない例も観察された。学習者は上級になっても会話をうまく終了させることが難しいものであるということが今回の調査で分かったのである。

今までの依頼談話の研究と教育は、依頼を切り出す段階、依頼を引き受けてもらうための交渉の段階に重点をおくことが多かったと思われる。今後は依頼の【終結部】の研究成果を教育上に応用していけば、依頼会話の教育の枠組みがもう少し補われるであろう。

注

- 1 この例ではA7の「じゃ」とB8の「はい」のやりとりで終結の最終合意が成立したと認定したため【別れ】に含むことにしている。
- 2 日本語では「すみません」のような謝罪表現には感謝の気持ちが含まれて

いることもあるが、今回の分類では「すみません」を謝罪表現に入れることにした。また、中国語の例では「親友だからしょうがないね」とか「ご飯奢るから」というような冗談めいた口調で「友情」もしくは「見返り」について言及した発話は今回は意味内容に基づいて「友情の確認」と「見返りの言及」に分類した。

引用文献

- 池田裕・三好理英子・村木万里子（2002）「中国語話者と英語話者の日本語における依頼—ロール・プレイによる発話データの分析」『多摩留学生センター教育研究論集』3号，51-60頁
- 尾崎明人（2002）「接触会話の研究から会話の教育へ—電話会話の終結部に見られるコミュニケーション問題を中心に—」ヘレン・マリOTT、宮崎里司共編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト』，69-84頁 明治書院
- 岡本能里子（1990）「電話による会話終結部の研究」『日本語教育』72号，145-159頁
- 岡本能里子・吉野文（1997）「電話会話における談話管理—日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析—」『世界の日本語教育』7号，45-59頁
- 小野寺典子（1992）「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データベースへの応用」『日本語学』11巻9号，26-38頁
- 熊取谷哲夫（1992）「電話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11巻9号，14-25頁
- 黄瓊芸（2005）「携帯電話の会話における開始部と終結部—日本人同士と台湾人同士の比較研究を通して—」『自然会話分析と会話教育—統合的モジュール作成への模索—』21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」，199-221頁 東京外国語大学（TUFS）大学院地域文化研究科
- 小林有加（2004）「中国人留学生と日本人学生との依頼会話—依頼応答から終結までを中心に—」『日本語教育と異文化理解』3号，25-69頁 愛知教育大学国際教育学会
- 浜田麻里（1995）「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略—」『日本語学』10月号，69-75頁

- 藤原智栄美 (1998) 「電話会話における終結部構造の日米比較」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』 2号, 1-13頁
- Clark, Hebert H. and Wade French (1981) “Telephone goodbyes”, *Language in Society*, Vol.10, 1, 1 -20.
- Shegloff, Emanuel and Harvey Sacks (1973) “Opening up Closings”, *Semiotica*, Vol.8, 289-382.